

ゆめにつき

フリッカリッカ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

少女、夢、ぬいぐるみ、ジャングル、手紙、翼、現実。

目次

現実の夢	1
動物の夢	3
手紙の夢	19
空を飛ぶ夢	28

現実の夢

ゆめの夢

いつも通り、定刻。

夜の10時30分にベッドに着く。彼女はこの時間でないと思えないらしい。それ以外には眠れないし、時間を過ぎてもまだ起きているとんだかイライラしてしまう。

医者には特に異常がないと言われた。よく考えて見れば、それはとても健康のサイクルが整っていて別の見方から言えばすぐ健康だと。言われてみれば言い得て妙ではあるが、彼女が思うところはそんなことではなかった。医者の言うことが間違っている、と完全否定したいわけではないが、彼女の腹の中ではそうではない、と誰かが彼女に語りかけるのだ。自分の睡眠はただの睡眠ではないことを誰かに知ってもらおうと、必死に自分自身に呼びかける何かがある。

眠る前に今日一日起きた出来事について心の中で反芻する。特に思い出に残らない日常を何とかして思い浮かべる。無味乾燥とした無意味な行為にも関わらず少女は必ず寝る前にそうするのだった。

今日は何が起きた日だっただろう。朝起きて歯磨きして、それから母が作ったらしい

味の無い料理を口に運んで部屋に閉じこもる。少し時間をおいて母が昼食を作ったというのでリビングに出て来て有機物を口に運ぶ。その後、朝と同じように自室に戻り閉じこもった。二回ほどトイレのために部屋を出て、しばらく経って夜7時を回ったところで夕食を食べる。もちろん、味の感想は持たなかった。そして再三部屋に閉じこもる。部屋に彼女が閉じこもっている間、家族は誰一人として彼女が何をしているかは分かっていない。否、分かるうとはしない。不可思議な、溝が存在していた。彼女の生き方に文句は言わないし、特に気にかける様子もなく親子は親子とも呼べない共有空間内での生活を営んでいた。彼女もその事について何の異論もない。

さて、自分の一日がいつもと変わりない色のない世界であることを確認して少女は部屋の電気を消した。電気を消せばすぐに瞼が重くなる。枕元には常にウサギのぬいぐるみがある。これも、無ければ眠ることが出来ない。おかしなことだが、寝るのに準備のようなものが必要だった。それが今まで述べてきたことだった。

後は勝手に急速に眠気が体をおそう。抗いようのない眠気に流されるようにして彼女は意識にかかる光の照明を落としていく。そして彼女が彼女をもう一度自覚するころには――。

彼女は彼女の夢の中に身を投ずるのだった。

これは一人の病弱な少女が日記に綴った夢の物語――。

動物の夢

動物の夢

気温がめつぼう高く、湿度は温水プールに浸かっているかのようなところに少女が一人倒れていた。上下長袖のパジャマ姿という暑苦しい格好の少女は胸に小さなウサギのぬいぐるみを抱えている。そのぬいぐるみに群がるように小さな赤いアリが数匹へばりついていた。急に、少女は誰かに起こされたかのように目を見開いた。……暑い、と小さく呟いてその小動物のような体を起こす。

見渡せば、木、木、木。とにかく、木ばかりだ。みたこともない大きな木が360度、ぐるりと少女を囲っていた。その木の一本一本にハート型の深い緑色をした葉をいくつもつけたツタが何本も巻き付いている。木の根本には赤や紫といった危険色の奇妙な形をした花が咲いていた。草は伸び放題で人の手が加えられている痕跡は一切ない。

「しかし、暑いねえ。これは蒸れるよ。特に、君に抱かれているせいで」

ウサギのぬいぐるみは継ぎ接ぎにされて色がおかしくなってしまうた耳を折り、唐突に話し始めた。あら、ごめんなさいレニ。気が付かなかった。少女は投げやりにそう言

うと、そのぬいぐるみを放す。レニと呼ばれたぬいぐるみは短いしっぽと長いヒゲを少し直しながら背伸びをする。

「今日の夢は……何だろうね。検討もつかないや」

レニは近くに生えていた草を無造作に抜き取って口の中に放ったが、不味い、と言って吐き出した。

「とにかく、環境は最悪」

体中に付いている赤いアリをレニと少女は払いながら声を重ねた。ここにいても仕様がなかったので、彼女たちは行く宛のないままに歩き始めた。出来るだけ、草が少なく歩きやすい道を選ぶ。歩いていると、見たことのない赤と黒で手足がいくつもある細長い虫や、羽が三対あるトンボとカブトムシの中間のような虫などがいた。それも、一匹二匹ではなく、何十匹もの群を作って。

「群を作る虫というのは蟻や蜂以外では珍しいね。虫は生物種の中で最も種類が豊富だから、集団ではなく個体を意識しがちだけど」

意識する脳があるのかしらと少女が聞いた。「確かめようもないね」と、レニはそれだけを呟いて両耳を折り曲げた。

それからしばらく経ったところ——詳しく言えば、少女が暑さに顔をしかめ、全身に玉のような汗をかき始めたころだ。ウサギのぬいぐるみのレニが急に両耳を立てせ

た。そして少女の顔を見て「気を付けて、何かが前から来るよ」と注意した。それを聞いた少女が前を注視すると、遠くの草がガサガサと音を立てながら揺れている。草の背はそれほど高くなく少女の腰には届かない程度だったが、音が立つ草の近くに人の影が全く見えない。ということは、この先で動く何かは小さな子供か、それとも背の高くない動物かのどちらかである。後者の場合、もしかすると肉食の恐れがあるため、少女は音を立てずその場を立ち去ろうとした。すると、唐突にその草から少女を呼び止める鋭く、低い声が聞こえてきた。

「待て。人間か？」

テレビで猛獣にあつたら背中を向けずに、そして走らずに距離を取るようにしろ、と聞いたことがある。もちろん、それは人語を介さない猛獣に限定される。では、そうでない場合は？ それは、人間と同じように接すること。ええ、そうよ、初めまして。少女は真顔で静かにそう言った。すると、声の主も姿を現した。そこに現れたのはちよこんと座りこちらを遠慮なしに睨み付ける狐の群。

「まあ、ボクは人間でも動物でもないんだけどね……。にしても、こんな暑いジャングルにお喋りの出来る狐さんかい。ずいぶんと夢の中も変わったもんだ」と、レニは皮肉味を声に帯びさせた。それに狐達はキロつと視線を向ける。おっと、とレニは赤いボタンで出来た継ぎ接ぎな視線を外した。余計なことを言わないで。泥で汚れたパ

ジャマ姿の少女にレニは忠告を受ける。

「人間、即刻ここから立ち去って貰いたい。道に迷ったのなら我々が案内しよう」狐の一匹がそう言うと、周りの狐達も口々に「これ以上私達の土地を荒らされないためよ」「案内を受けるだけマシだと思え」「貴様が大人の男だったら喰い殺しておるわ」と少女達を一斉に罵った。

「どうする？　ボクは出来れば喰い殺されるのはごめんだね」

レニは少女を見る。少女は小さく溜め息をついて額を流れる汗をパジャマの袖で拭った。その提案を断る理由が特に見つからなかったため、少女は狐達の案内を受けることにした。

「では、ここからだ。二度と戻ってくるな」

少女を呼び止めた低い声が二人を先導した。辺りを飛び交うハエのような形をした灰色の虫を鬱陶しく感じながら少女はそれに従う。狐の先導する道は先ほど来た道とほとんど変わらず、二人は何となく脱力感が否めなかった。「もったいないね」レニのそのぼやきを最後に、ジャングルには鳥の鳴く声や木々が微風に揺られる音だけが響くだけとなった。途中で分かれ道がいくつもあり、案内なしでは先ほどの元いたところには戻ることが出来ないだろう、と少女は思う。そして、小さく頷いた。レニが変な目で見ることが出来なかった。そして、左右にうねりながら進み四十回目くらいの分かれ道

を右に曲がると、ようやくちゃんとした道が見えてきた。

「ここから道なりに進めば人間がいる。貴様がどういつた理由でこちら側へ来たかは知らんが、二度と立ち入るな。以上だ」

狐の群はそれを皮切りに走って来た道を引き返して行つた。それを見えなくなるまで二人は見送つて、道を進む。道と言つてもただ、草が抜かれていて土はそのまま。人間が振り固めているためか、歩きやすいのだが、ところどころに蜘蛛の糸のような細い薄紅色の巣のようなものが丁度頭の高さにあつて、少女はそれを見つけるたび屈みながら歩かなければならなかつた。気温と湿度は全く変わらず、少女は顎から汗の滴をいくつも落としながら歩く。「大丈夫？」レニが心配そうに顔を覗くと少女は無言を持つて答えた。この熱地獄をどれくらい歩いただろうか。少女の意識が朦朧としてきたときに、ようやく小さな村にたどり着いた。

「見てよ、やつと人がいそうなところに着いたよ」

レニが飛び跳ねながらその村に足を踏み入れた瞬間。

「止まれ」

一人の背の高い上半身裸で体中に動物の骨や貝殻を装飾した、鷹のような鋭い目つきをした男がレニの耳を掴み持ち上げた。

「ここは貴様のような動物の来るところではない。即刻立ち去れ」

「……だつてよ。どうやらボクらはこの夢からは歓迎される立ち位置にはいないらしい。とは言つても、ボクは動物でも人間でもないんだけどね」

レニは少女を流し目に見ると、そこには恐れていた事態が進行していた。

「あの子は人間だから、助けてあげてね」

レニは男をちらつと見て、倒れているパジャマの少女を示した。少女は息こそまだしているものの、動くことが出来ない。脱水症状のようなものに陥っていた。レニを持つたまま男はその少女の有様を見て、助けないわけにはいかない、と言いたげに首を横に振つて少女の元へかけ寄つた。そして、荷物でも持ち上げるかのように脇に抱えて持ち上げる。男は「人間ならば仕方があるまい」と言つて少女を村へ運んでいく。

小さな古い木で出来た民家に少女とレニは通された。少女は粗末な布団の上に横にされ、そこに数人の女性が現れレニを軽く睨んだ後、赤い液体の入った透明な容器を持つてきた。

「それは？」

レニが訪ねると女たちは「クレイドの実のジュースさ」と口早に言つてそれを少女の口に流し込んだ。少女は少しうなるような声を上げて、また眠りについた。その表情は先ほどより少し楽になっている。

「へえ、すごいねそれ。一体どんな効果が期待できるんだい？」

「急激な体力の低下を回復させる。多少依存性があるがね」男は水を木のコップで飲みながら言った。

「多用と感心はできないな」レニは嫌味に言う。

「貴様らにはこれで十分だ」

やれやれ、とレニは両耳を折り曲げて「どうしてそうまでしてこの生き物は自分たち以外を毛嫌いするのかね」と言う。

「悪いのは奴らだからな」

男は持っていたコップから軋む音がするくらい、手を握りしめていた。それを聞いたレニは興味なさげに耳を交互にピコピコ動かす。ふと、民家の入り口に目を向けると大人の男女、子供や老人までもが二人を警戒の目で見ているのが分かった。

「にしたって人間と人間でも動物でもないボクらにこの仕打ちはひどいんじゃない？」麻薬のようなものまで飲ませて、と付け加えた。すると近くにいた女たちや入り口付近にいた老人たちが血相を変えて怒鳴り散らした。

「ふざけるなよ化け物。貴様らは先人たちが発見した偉大なる成果をバカにするつもりか！」

「こんな奇妙な格好をした人間を助けて貰ってるだけ感謝しろ」

などなど。もちろんレニは聞く耳を持たない。耳を折り曲げるどころか、丸めてい

た。その間も怒声や罵声は続くが、そのおかげで少女は目を覚まし、上体を起こした。それに気が付いたレニは赤いボタンで出来た目を輝かせる。

「目が覚めたんだね。よし、じゃあさつきとこんな居心地の悪いところなんて出ていこう」

しかし、少女は手でその意見を制し、口を開いた。

何があつたのですか。お聞かせください。

しばらくその場には様々な静寂が流れた。「出たよ、この流れ」と言わんばかりに首を左右に振るレニや、その意外な言葉に呆気に取られて声が出ない入り口の人間たち。女たちはこんなに早く目が覚めるはずがない、という驚きで口を開けている。そして、男は目をつぶって、そして頷いた。

「聞きたいというなら聞かせてやろう」

十秒ほどたつて男が口を開いた。

約五年ほど前にとある事件が起こつたらしい。それまではこの村も上手く自然と共存していて、今のような動物との険悪なムードもなかったという。「そもそも、この夢で何故動物が話せるのか疑問だね」というレニの声を無視して男は続ける。

「だが、ある時動物たちの何匹かがとても恐ろしい姿に変貌していた……」

その言葉に周りの村人が過剰に反応する。「そうだ、奴らは手が三本になったり下半

身が別の個体同士とつながっていたりした！」一人の老人が声を上げる。レニが再び耳を折り曲げた。

「我々はそれを悪魔の所行と見なし、動物達を隔離した。奴らに触れてしまえば、こちらもどうなるかたまたまもんじやない」

それから、男は動物達との隔離生活について長々と語りだした。男や村人達は常に少女に動物達は恐ろしい存在だと、すり込むように繰り返し返していた。だが少女は、男達が動物達に毒を散布した、という話のところで、もう結構です。お話ありがとうございます。レニも驚いている。

「急にどうしたんだい？ もう時間かい？」

いいえ、違うわ。もちろん時間がないのはそうだけど、あのままいたら本当に動物達を嫌いになる。

「つてことは、動物達のところにもう一度行くんだね？ やれやれ、また倒れても知らないよ」

少女は小さく頷いて、大丈夫と言って村人達が啞然としている中、何の未練もなく村の境を越えた。

しばらく歩いて、少女は歩を止めた。そして持っていたぬいぐるみをどしゃつと地面

に落とす。

「痛いな。どうしたんだよ」

レニが聞くが、少女は何も言わなかった。ただただ、そのまま今出ていった村を一度睨み付けてまた歩き出す。

強者の恐れほど恐ろしいものはない。と、小さく言い残して。

また、同じ道を歩く。大量に生えた奇妙な形をした植物に目を向け、そのたびに悲しそうな顔をする少女。レニもそれを黙ってみる。そして、一度道を外れしばらく歩いたところに小さな池があった。いや、それは池と言うより沼と表現するべき、濁りを持っていた。まるで汚水だった。

「これは酷いね。魚どころか、有機物さえ存在するかどうか分からないね」レニが紫に汚れた沼を眺めて嘆息した。いいえ、と少女は言つて道に落ちていた小石を拾い上げ沼へと落とした。すると、落下地点が大きく跳ね十五センチ程の魚が姿を現した。それは、村人達の言うように本来背びれのあるところから蛙のような足が飛び出ていた。

「本当にここらへんの森は訳が分からない生物だらけだ」

少女はその言葉にそうね、と言つてレニを一瞬見た。レニは少し不機嫌に耳を折り曲げ「ボクは違うからね」と言う。十分変よ。少女は笑いながら言つて沼を後にした。

再び、熱帯の苦しいジャングルを歩き回る。天気は晴れていてそれでいて湿度が高

い。しかし、少女はさっきのように倒れてしまうことはなかった。それは、暑さに対する慣れなのだろうか、それとも。

「大丈夫みたいだね。最初にまた動物達のところに戻るって言つたときは心配だつただけだ」

ダンゴ虫に羽が生えたような十センチ程度の虫を避けながらレニが言つた。

この森にはどうして奇形生物が多いのかしらね。少女は唐突に尋ねた。

「それは・・・そんなことボクに訊かれても分かるわけがないじゃないか。ここは君の夢なんだから君の想像がほとんどなわけだし」

レニは首を捻る。そう、私の夢。だから、この夢は私の意識の再確認のようなもの。少女は呟いた。

「いつも君はそんな感じで夢を見ているようだけど、実際のところどうなの？」

どうなの、とは一体どうなのだろうか。少女はレニが何を持って「どう」と言つていのか一瞬間困つたが「意識の再確認が本当の理由であるかどうか」の「どう」として取つた。もちろん、それで解釈した少女は当然答えに困つてしまう。

意識の再確認が大事、と言われれば実際問題そうではない。その気になれば夢落ちも可能なのだ。更に、意識を再び振り返つてみたところで特別自分に変化を起こそうという気にもなつたことはない。今まで睡眠をするたびに様々な夢を見続けた少女だが、レ

二にこういった質問をされるのは初めてだった。

寝ている間に脳は記憶を整理すると言うが、少女にとって夢とは整理の行程を詳しく間近で観察できるだけなのである。そこに目的はなく、流れに逆らわず流されるままに、夢を見ている。

特に特筆して言うことはないけど、普段自分が何を思ってるかは知りたい、とだけ少女は答えた。だからといって、今回の夢が一体少女の記憶をどう整理すれば見れるのか知る由もないのだけど。

「いや、そつちじゃなくてさ」

しかし、レニは少女の答えを否定した。

「こんな毎回内容の重たい夢ばっかりでさ。辛くはないのかい？」

心配するような口調だったが、それはある答えを求めているような、鎌を掛けるようなニュアンスも含んでいた。それを知ってか知らずか、少女はしばらく黙り込んだ後、その小さな口を物でも噛むように呟いた。

私にとっては現実の方が地獄よ、と。

さて、再び少女の足取りが悪くなってきた頃だ。

「止まれ」

背後から聞き覚えのある低い声が聞こえてきた。がさがさ、と辺りの藪の中から出て

きたのは先ほどの狐の群。それに加えて雑種の犬がちらほらいた。

「はあ、どうやら無事に着いたようだね。本当にこの辺は道が分かりにくくて嫌になるよ。はあ」

レニが半ば降伏したように両手を上げてこれ見よがしに嘆息した。ついでに大きなため息を二回入れて狐達の神経を無駄に逆なでするのも忘れない。なんて無神経なぬいぐるみだ、と少女は心の中で思う。

「貴様ら、二度とここには近づくなと言ったはずだ。喰い殺されたいのか？」

うなりを上げながらレニを睨む狐達。数匹の雑種の犬の内一匹が大きく吠えた。「喰い殺すなんて物騒なこと言うもんじゃないよ」レニは嫌味たらしく言う。それに眉をひくつかせて狐達は本当に毛を逆立たせた。これ以上レニと狐達の関係をほつとくと取り返しがつかないと判断した少女はこう切り出した。

レニを片手で制しもう片方の手で指を一本立たせて、一つ話を聞かせてください、と動物達の顔色を伺った。

「……かわいいう女の子の頼みとあっちゃ、狐さん達も降参かな？」

そんなことを囁くレニを少女は裏拳で顔面をぶった。ふかふかし過ぎて全く手応えはなかった。

それからしばらく、というかかなり時が流れた。少女とレニが再び長いウォーキング

を狐達に強要されて、到着予定時刻を軽く一時間くらいオーバーしてようやく彼らの住む「ムラ」にたどり着いた。

「ムラ、というかただの洞窟だね」

レニはあっさりと事実を述べた。少しはオブラートに包んで物を言っただけで欲しかったが今更な感じがしたため少女は無視する。狐達に案内されて湿度九十%以上の暗がりやを左右になんども曲がりながら歩くこと二十分前後。

「ここだ。そこに座れ」

狐達がそう言っただけで連れてきた場所はただっ広い何もないところだった。少女とレニが適当に小さな座りやすい石を選んで座ると、洞窟の岩の割れ目からぞろぞろと小動物が現れる。兎、猫、蜥蜴、鳥、などなど。どうやら大型のホニユウ類はいないようである。しかし、そのすべての動物達はどれもこれも見るからに痩せていた。足を引きずる兎の姿が少女の目には痛々しく映った。

「みんな元気がないね。どうして、森の中に住もうとは思わないんだい？」

レニは少女には既に分かっていることをあえて狐達に聞いた。

「森の中は毒が充満している。余り多く吸い続けると意識を失ってそのまま死ぬからだ」

そんなことは知っていた。実際に少女は二度もその目にあっている。あの人間達の

くれた高い依存性と解毒作用のあるジュースがなければ今頃夢から覚めていただろう。レニはそれはお気の毒に、みたいな雰囲気を感じながら遠慮がちに「ふーん」と頷いた。「これが、現実だ」

狐は言うが、少女にとっては夢である。しかし、夢の中の現実がこれほどまでに破滅していることに何も思わない少女ではない。

心が傷んだ。

「さて」

と、少女とレニの背後から瘦せこけた猿のような生物が降り立って、その体を拘束した。

「……!!? 何をする気だい？」レニは少女の代わりに口を開いた。少女も視線を狐に向けて睨みつける。

「そう怖い顔をするな。なに、貴様ら人間のせいだ森を追われた我々がその怒りを晴らすために人間を使うのは自然なことでは？」

口元を醜く歪ませて動物達は二人に近づいてきた。

「ふう、やっぱりこうなると思ってたんだよ」

レニは少女に視線をやった。どうするの？ と聞いてくるような視線。

そして少女は呟いた。

夢落ちしましょう、と。

腐ったリングと新鮮なリングを同じ空間に置くと、より早く両者とも腐っていく。お互いが猜疑心を抱くと両者は共に腐っていく。

救いようもないその言葉は夢にも現実にも言えることだった。

目を覚ますとそこには見慣れた天井と吐き気のするようなきつい香水の香りがあった。この香水は母が好んで使うものだ。食欲の無くなるようなドギツイ臭いに顔をしかめながら少女は上体を起こした。朝の七時半。登校時刻はとつくに過ぎていたが学校に行く気のもなれない。かれこれ二ヶ月は休んでいる。それなのに両親が何も言わないのは少女が両親を嫌っていて、両親が少女を嫌っているからなのだろうか。そんなことを考え、先ほどまで見ていた夢と照らし合わせながら再び体を倒した。両腕に抱いたウサギのぬいぐるみにほのかな暖かみを感じて。

手紙の夢

手紙の夢

四月十五日 金曜日

誰かがこの手紙を読んでもくれると信じて、僕は広い海に流した。

もし、返事をくれるというのなら、喜んで僕は受け取ろう。

ただ、僕は罪深い人間だ。

なぜなら、最愛の人を死なせてしまった。

こんなことを話したところで、どうにもならないのだけど、誰かにこの思いを届けた
いだけなんだ。

無視してくれても構わない。醜い懺悔のようなものだから。

四月十八日 月曜日

あなたの手紙を読んで深く共感し、返事をしようと筆を取りました。

私もあなたと同じで最愛の人ともう二度と逢えなくなってしまったのです。

気持ちは痛いほど分かります。私も同じ傷を持っていますから。

それでも、悲しまないで下さい。

きつとあなたのせいではありません。

最愛の人の分まで生き抜くことが大切です。

私も、絶望しないように努力しているのでお互い、がんばりましょう。

四月二十三日 土曜日

お返事ありがとうございます。

まさか、本当に人に届くなんて思ってもみませんでした。

それで、動揺してしまい返事が遅れてしまいました。

僕は、出来ることならもう一度あの人に逢いたいと思っっているのです。夢みたいなものです。

もちろん、そんなことは出来ないと分かっています。

どうしてあの時、僕はあんなことをしてしまったのだろうと、毎日そう思わなかった

日はありません。

ごめんなさい。もう、思い出すのも辛いのです。

あなたのように、前向きに生きることが僕には出来そうにありません。

一生この枷をひきずって生きていくでしょう。

四月二十五日 月曜日

ごめんなさい。私の方も無神経でした。

同じ傷だからと言って、私の考えを強要させるのは良くなかったです。反省していません。

でも、その枷で自分を殺すことはしないでください。

死ぬことは罪滅ぼしにはならないですし、あなたの最愛の人に逢える保証もないのですから。

どんなに深い傷でも、いつか癒えるときが来ます。

その日まで、後ろ向きでもいいですから生きていて下さい。

あなたが死んで、あなたのように悲しむ人がいるはずです。

少なくとも、私がその一人です。

四月三十日 土曜日

ありがとうございます。

死ぬなんて、僕の浅はかな考えを止めて下さって。

あと一步で僕はあなたに大きな傷を与えるところでした。

色々、考え直したのですが、あなたのように前向きには生きることが出来ませんが、生きようという意欲が湧いてきました。

小さなことですが、これが僕の最初の一步です。

いつまでも立ち止まってたら、彼女に怒られてしまいますから。

五月四日 水曜日

お手紙、拝見しました。嬉しいです。

こんな私でもあなたのお役に立つことが出来て。

私は子供の頃からドジで、人のお世話になることの方が多かったですから。がんばって下さい。生きていけばいつか報われます。

今は辛くても、きつと将来は希望があるはずです。

お互いに励ましあいながら、生きていきましよう。

五月十日 火曜日

分かりました。

それにしても、子供の頃からドジなんですか。とても手紙からは想像つきません。

ドジと言えば、彼女も筋金入りのドジでした。何もないところで転んだり、一日に一回物を落としたり。

そんなところが僕は好きだったんです。

守ってあげなくちゃいけない、って思えて。

だから、あの時を凄く後悔します。

励ましてくれてありがとう。

五月二十三日 月曜日

返事が遅れました。

もうこの瓶には手紙が入り切らなくなってきましたね。

次回から瓶を変えませんか？

私と同じようにドジですか。

何だか親近感が沸きます。

あの・・・よろしければどうしてそんなに後悔してらっしゃるのか、聞かせていただけませんか？

私も、私のことを言いたいと思います。

実は（ここから下が意図的に切り抜かれている）

よろしく願います。

八月十三日 土曜日

突然ですが、僕の国で戦争が起きました。

僕は兵隊として召集されるためしばらく返事が返せません。

もし、戦争が終わってもまだ僕が生きていたら、お会いしに行きます。

待っていて下さい。

十がつはち日 とうよう日

こんにちは。

ぼくはせんそうで、やられてしまいました。

からだがおもうようにうごきません。

たぶんもうへんじも出きません。

ごめんなさい。ごめんなさい。

ごめんなさい。ごめんなさい。

十月十九日 水曜日

そちらに、お会いしに行きます。

二十六日に着くと思うので、よろしくお願いします。

ウサギのぬいぐるみはその最後の手紙を読み終わり、口を曲げていると。

「レニ」

丁度少女が戻ってきた。

「やあ、どうだった？」

レニは手紙の束を振りながら少女に尋ねる。

「この手紙の主、男の方はやっぱりその家の主人だったわ。隣の家の人が言ってるから間違いない。数ヶ月前に自殺したらしいわ。戦争による怪我が原因だね」

ふーん、やっぱり。と、レニは抑揚のない声で頷いた。そして、再び少女の方を振り

返つて尋ねた。

「でも、流石にこの女性の方は分からないでしょ。だって、はるか海の向こう側にいるんだよ?」

しかし、少女は首を振つて言う。

「ところが、この手紙のやり取りには不可解なトリックがあるのよ」
「?」

レニは耳と首を折り曲げる。それに少女は海の方を指さして説明する。

「この海の潮の流れは朝と夜で全く逆になつてるの。この島はかなり他の島とは離れてるから、物が流れ着くことはまず無いんだって、漁師さん達が言つてたわ」

「じゃあ、この瓶が対岸に流れ着くことはあり得ないね。物が流れてこないなら、物が流せるはずがない」

その通りよ、と少女は言つた。レニがいよいよ、と言う風に頭を掻きながら手を振る。「だから返事が返されるわけがないの。——瓶を海に流したら、次の日には同じ浜辺に戻つてきてるでしょうね」

じゃあ、一体誰が。レニが神妙な表情で呟いた。

「この男の人の最愛の人よ。それ以外考えづらい」

「……えー……と。大丈夫かい? 特に頭」

レニが心配そうな表情に切り替わった。

「だって、死んでるんだよ？ 確認は取れてるんだよね」

そのレニの問いに少女ははつきりと頷いた。海の波はいたって穏やかだが、レニの心境は穏やかではない。

「お葬式まで行われたらしいわ。しかも、しめやかに」

「ふーん。その付け加えの必要性は置いといて、死んでるんだから有り得ないだろう？

ペンも持てないじゃないか」

「まあ、そうね」

普通なら、と少女は言う。

「でも、ここは夢の中よ」

「死後の世界に海が繋がっているとでも？ まあ、夢だから動物が喋ったり、人が空飛んだりしても普通だったからね」レニは顎に手を当てる。名探偵のように決め顔で。

「そういうことにしましょう。だとしたら、手紙の最終日と男の人の死亡時期が重なるのも頷けるわ」

「まるで迎えに来たみたいだけど」

じゃあどうして。と、レニが続ける。

「この最愛の人は自分を隠して手紙の返事をしたんだろう？」

それに少女は少し頭を揺らす。少し風が強く吹いた。

「さあ。——本当に愛してたから、自分を忘れて新しく一步を踏み出して欲しかったんじゃない？」

何にしたって、この手紙からは推測しかできない。

「じゃあ、帰りましょうレニ」

「え？ もうかい？」

レニは素で驚いて聞き返す。

「ええ、もう夢は見たじゃない。手紙の中だけど」

少女は笑って言った。

「それに、その男の人の夢は叶ってるもの」

再び逢うという夢は、死後の世界で。

空を飛ぶ夢

空を飛ぶ夢

自由を。

あの大きな自由、空に広がる無限の世界を。

私は望んでいた。この自由を手にするのを。誰にも頼らずに一人で自由を手にするという夢。そう――。

空を飛ぶ夢を。

小さな工場で奴隷のように働かされていた私は、そこで得られるなげなしの金で病気の妹を何とか養い、その日をおくるのもぎりぎりなライフラインを保っていた。もう、綱渡りみたいなものだ。何か仕事でやらかしてしまえばその日の給料は普段の半分。そうしなければ私はその日何も食わずに妹に付きつきりで看護に当たっていた。

「おいしい!! ソーダ! ぼさつとしてねえでさつさとこの廃材あつちに運んじまいなア!!」

働き先の親方（私はボスと呼んでいる）が私の余り自慢できない恥ずかしい名前を叫び、ツーリング（ここで言う自転車のようなもの）のクズを蹴り飛ばしていた。

「イエッサー、五秒以内に！」

私はすっかり板に付いてしまったこの仕事独特の返事を反射的に行い、本当に五秒以内に廃材を焼却炉へ運んだ。こうしなければ給料が半分になってしまう。恥ずかしくても妹のためにやるしかない。

そして、バカみたいな灼熱の中で何時間も働いた私にようやくボスが「今日はここまです。ご苦労だったなあ」と二枚の紙幣を渡してドス、ドスと部屋の奥へと戻っていった。これで、仕事の終わりである。私は体に溜まった疲れを吐き出すように長いため息を一つついた。

「よっ、ソーダ。調子はどうだ？」

そこにボスの息子のルーカンが近付いて隣に腰を下ろす。短い短髪が汗に濡れて光っている。

「どうもこうも、サイアクよ。アンタんとこの親父さん、もうちよつと労働条件軽くして欲しいわ」私はルーカンに無理なお願いを出す。もちろんルーカンは「それは無理だ。俺の親父はおっかなさ過ぎる」と笑いながら言った。

「でよ、ソーダ。相談なんだが」

ルーカンはギャグのつもりで言ったつもりはなさそうだが、私には少し耳に障る言い方だ。と、私がむっつとしていると。

「お前。妹と夢、どっちか一つに早く決めろよ。じゃねーとお前が死んじまうぞ」

ルーカンは真剣な顔をして私に迫ってきた。そして言葉が続ける。

「つーかお前と妹、うちに来いよ。うちならそれなりに家も広いし、金もある！ 親父はまあ、アレだけど俺が何とか説得してやるから、な？」

その言葉は嬉しかったが、逆に惨めな気分にもなった。今まで一人立ちして生活を保っていたのが唯一の世間に自慢できたことなのに、それを頭から否定された気分だ。また、理由はもう一つある。だから私は強がって、無理に笑顔を作って言った。

「無理よ。私は妹も夢もあきらめない。アンタんとこ行ったら、私の夢は叶えられなくなっちゃうじゃない」

私はそれからルーカンと一緒に居づらくなくて、すぐに働き先を後にした。仕事が無事終わって手に入れた二枚の紙幣を握りしめ、行きつけの安い食料のある裏市に行くために路地裏に入った。すると。

「……………え」

路地の真ん中に綺麗な服を着た同い年くらいの少女が倒れていた。ここは普段人通りが少ない。また、少女のその小さな白い手には汚い継ぎ接ぎで何度も直された後のあるウサギのぬいぐるみが抱かれている。

「……………行き倒れ？」

私はその少女のそばに座り込み、その体を揺する。返事はない。どうやら死んでいるようだ。

「・・・・・・・・」

しばらく考えて、私は少女の着ていた衣服に手を伸ばす。柔らかい、そして美しい刺繍が施されていた。布屋に売れば結構な金になりそうだ。

「死人に口無し、と・・・・・・・・」

私は少女が全く起きないことを再び確認して、その衣服に手をかけると・・・・・・・・。「待ってよ」

ウサギのぬいぐるみに逆に手をかけられた。

「助けようとは思わないのかい？ やれやれ、ひどい心の持ち主だ」

ウサギが、ぬいぐるみが。

何か喋っている。

「きゃあああああああー！」

それだけでインパクトは十分すぎるほどだった。

思わず悲鳴を上げてしまう。今まで生きてきてこんな超不思議生物に会ったことなんて一度もない。というかこれ、生物なのか？

「ちよ、おち、落ち着いてよ。とりあえず、話を・・・・・・・・」

「化け物!!」

私は思いつきりウサギの耳を掴んで地面に叩きつけた。だが、思っている以上にウサギはふかふかしていて、ボスつという音がただけだった。

「いったいな! 痛くないけど、いきなり叩きつけるなんて失礼だな! 親の顔が見たいよ!」

ウサギの台詞に私はカチンと来て、怒鳴った。

「うっさい! 親は勝手に死んだ!」

しかし、ウサギは「やれやれ」と首を横に振って言う。

「じゃあ、写真でも何でもあるじゃないか。それに、親の死を『勝手に』なんて言うんじゃあ無いよ」

嫌みったらしく言うウサギの言葉のある単語に、私は首をひねらせた。聞いたことのない言葉だったのだ。

「シャシン? 何それ?」

ウサギは虚を突かれたかのように、口をポカンと開けようとした。だが、口は黒い糸で縫いつけられていて開かなかった。

「はあ、なるほど。つまり、ここは僕らの時代とは少しばかり前なんだね」

レニ、と名乗ったウサギのぬいぐるみは知ったようなことを言い出した。私は「アン

タの話が本当ならね」と付け加える。

この喋るぬいぐるみと寝ている少女は、夢の世界から来たらしい。おそらく、進んだ文明を持つ他国からやって来て、夢のうんたらは宗教的な何かだろう。この世界ではそんなことは珍しくもない。

「にしたって、古くて狭い部屋だね。一人暮らし?」

「前者はその通りだけど後者は違うわ。妹が奥の部屋で寝ている」

ふーん、とレニは興味なさそうに適当に首を振った。じゃあ、何で聞いたんだ。

「ところで。君の名前は? 見るからに名前はあるようだけど」

「逆に、見かけで名前がないって判断したことがあるの?」

「ないよ」ぬいぐるみは鼻を鳴らした。

「……私の名前はソーダ。そっちの寝てる子は?」

私は余り好きではない自分の名前を告げる。するとレニは耳を折り曲げて再び鼻を鳴らした。しばきたい。

「まあ、この子は……」

レニが口ごもりながらソーダの普段寝ているベッドに横になっっている少女に目を向けると、いつの間にか少女は上体を起こして私を見ていた。

「私は……キキョウと呼んで。助けてくれてありがとう」

キキヨウは小さく綺麗な声でそう答えた。聞きなれない名前である。

「……………」レニはキキヨウという少女の方をちらりと見て、「じゃあ、キキヨウ。とりあえず、今の状況なんだけど——」と言ったところで、キキヨウは「分かっている」とすぐに切り返した。

「夢の中だと眠りが比較的浅いから、話の内容なら大体耳に入ってる」

「へー、初めて聞いたよ。何で今まで黙ってたんだい？」レニはキキヨウに近付いて肘で小突く。

「だって、真つ先に私を起こすじゃない」

レニはそう言われて「ははあ、一理あるね。なるほど」とバカみたいに頷いた。なにを二人が言ってるのか分からない上に、レニのこの白々しさに私は少し腹が立つ。

「で？ 何しにきたのよ、アンタら」私は痺れを切らすように問いかけた。

「ソーダ、と言ったわね？ 私たちは流浪の民みたいなものだから……………。気にしないで。時期が来たらすぐに居なくなるから」

キキヨウは私のベッドから降りて何も持たずに出口のドアノブに手をかけた。ウサギのぬいぐるみもそれに続く。

「ちよ、どこ行く気よ？ 一体何なのよ、答えなさい！」

私は出ていこうとする少女たちを呼び止めた。しかし、キキヨウはドレスを翻すよう

に振り返り、口に人差し指を当てたまま「ごめんなさい、気にしないで」と言つて、外へと出ていった。

「……………訳分かんないわ、全く」

私は首を捻りながら少女の言葉を反芻した。

「気にしないで、か……………」

しかし、「時期が来たら」と言つていた割にすぐに居なくなつてしまつたな、と私は何だか騙されたような感じになり、妹の寝ている部屋へと向かつた。

少女と奇妙なぬいぐるみはしばらく談笑しながら町の中をグルリと一回りした。町の広さは大きい、栄えているところと寂れているところの差が激しく、人通りも中心部に集中していた。もちろん、古いビルが立ち並び、昼間なのに夜であるかのごとく、日の差し込まない路地にも人はいた。ソーダの着ていた服よりも、もつとくしゃくしゃでぼろぼろな、布とも言えないようなぼろ布を体に巻く人間たち。それらの前を少女とレニが通るたび、奇異な視線を当てられる。パジャマとはいえ、それなりに高価なのだ。周囲の貧相な視線が少女の高貴な服装に注目しないはずがない。また、その好奇心が生み出す視線は背後を付きまとう喋るぬいぐるみにも当てられる。レニはその視線を居心地悪く感じ、先ほどから貧困層の連中に聞こえるような声で悪態をついている。それがまた視線を集めることになるということを、レニは気付いていないのか、と少女が思

うのは当然のことだった。

(にしても、疲弊してる)

キキヨウは一度目の視察でそんな感情を抱いた。誰もが疲れている、と思った。それは、スラムにいた人々もそうだが、中心街にいた人間たちにも言えることだった。少なくとも、自分たちよりかは確実に。

「レニ」少女は小さく名前を呼んだ。

「なんだい？」

「私って、最近疲れてる？」

すぐく、アバウトな質問だと少女は思う。自分の疲れの度合いなど自分が最も知っていることなのに、何を聞いているのだ、と。

しかし、レニの答えは迷いが無く。

「うん」と短く答えた。

その短絡的な答えが、少女の求めていた答えなのか。それとも、全く予想していなかったものなのかは分からない。ただ、少女に言えることは一つ。

「そうね」

さっきの動物の夢で彼女は確かに疲れていた。

「で？ どうして戻ってきてるのよアンタら！」

私の部屋で私の怒鳴り声が響く。標的はもちろんうさくさい少女とちんちくりんなぬいぐるみ。ノックも無しに家の上がり込んでいたからなおさら怒鳴る。

「どうしてって、疲れたのよ」キキヨウは当然のように答えた。

「夕方に流浪の民とか訳分かんないこと言つてたじゃない！ それが何？ 何でぼつちり戻つて来てるのよ？」

「君だけは元気だね、ソーダ。まるで弾けるように」

レニが私の名前をバカにしながら言う。燃やしたい。

「とにかく、ここは私と私の妹の家なの。借り住まい！ 泊まりたいんなら余所に行きなよ！ ここは宿屋じゃないわ！」

私は堂々と私のベッドでくつろぐ二人に向かってもう一度怒鳴る。だが、一人と一匹はけろりとした表情で「大丈夫」と声を重ねた。

「屋根さえあれば、どこでもいいから」レニは耳を振りながら言った。

「宿屋行け!!」

そのとき、私の後ろの扉の向こうからかすかな声が聞こえた。

「…………お姉ちゃん」小さく震える声。それを聞いた私は急いで声のした部屋の中に入る。それを察したのか「…………先客がいたみたいだね」と、ぬいぐるみが呑気に言う。

「違うわよ、妹よ」私は早口に説明した。

すると、ベッドで寝ていた私の妹のハツカは力のない手で私の腕を掴んだ。「どうしたの?」と聞くとハツカは弱々しい声で言う。

「泊めて……あげようよ。私は、大丈夫だから」

どう見ても大丈夫じゃない。日が経つにつれてどんどん妹は疲弊していつてる。毎日ベッドで寝ているだけなのに、どうして――。

「病気がしら」

キキヨウがいつのまにか隣に来ていた。そして、ハツカの広いおでこにその冷たそうな手を当てて「……久しぶりね」と呟く。

耳を疑った。

「は? え? 何が久しぶりなの? ハツカのこと知ってるの?」

私はキキヨウを問いつめる。どうして、この訳の分からない人間じみた人形を持ち運ぶ、人形じみた人間が妹のハツカに触れて「久しぶり」と言うのか。場合によっては……。

「知らないわ」キキヨウは即答した。

何だ今の私の焦り具合。恥ずかしい。私は頬を真っ赤に……とまではいかないが、それでもほんのり赤く染めた。

「じゃ、じゃあ何でそんなこと！」

私は何故か焦って聞いた。さっきの焦りがまだ残っているのだろうか。

「.....」

レニが珍しく黙っている。こんなとき、このぬいぐるみなら笑えない冗談を言うところだがキキヨウの顔をじつと見ているだけだ。

「そうね」キキヨウはしばらく無言で物思いにふけた後、こう切り出した。

「久しぶりに、ヒトに触れたわ」

聞いて後悔する。私が恥ずかしさや焦りを感じていたことがもの凄く幼稚に思えて、悲しくなった。穴が無くて二メートルくらい掘ってから入りたい。

そして、しばらくの沈黙の後ようやくレニがいつものテンションで言った。

「じゃ、ソーダの家に泊まらせてもらうけど。ボクとしては一泊二日朝食付きのコースを無料で頂きたいなあ」

もちろん直後に全力でしばいた。痛い！と言いながらぬいぐるみは叩かれて壁に叩きつけられる。もふつという気の抜ける音しかしなかった。

それからしばらくの間、質問が飛び交った。聞かれたことはなるべく包み隠さず答えた。この国は今、作物がとも凶作に陥っていて値段が高く私たちみたいな貧困層には苦しい生活だということ。一般的な乗り物はツーリングと呼ばれる自転車のようなも

のだということ。仕事のことなど、色々。そして、質問回答者がハツカに移ったときだ。「ハツカちゃん、体調は大丈夫？ 病気なの？」と、まずキキヨウが聞いた。

「……うん。お医者さんには……まだ見てもらってない」

ハツカは弱々しく答える。その答えにキキヨウはチロリと私の方を見たので、誤解されないように言う。

「……家を見ても分かるように、貧しいのよ。医者に見せるお金なんて、余るはずもない」視線を逸らす私にレニが言われたくない言葉を言い放った。

「君の食料費とか、削ればいくらでも出てくるだろうに」

分かっている、そんなこと。ただ、それが出来ない。削れるだけ削っているけど、これ以上は削られない。

レニは私が怒るところを期待していたのだろうか、耳を折り曲げて小さく息をついた。

「……うさぎさん、お姉ちゃん虐めないで」と、ハツカは少し口調を強めた。それにレニは意外だったのか、それともワザトか。

「優しいんだね、ハツカちゃんは」と、言った。

ハツカはそれに何と答えればよいか分からず、首を横にふるふると振ってしまふ。それに少しだけ、イラツときた。

「…………自分の病気に責任を感じるのはお門違いよ、ハツカ。私が仕事でヘタしなきや大丈夫なことよ」

「でも、お姉ちゃんは私のために一生懸命働いてる……………」

そのハツカの言葉が余計、私を苛立たせる。妹に心配される姉なんて……………これじゃあ、まるで立場が逆だ。

「……………」黙って私とその場を立ち去ろうとすると、

「どこに行くのソーダ？」キキヨウが私の腕を掴んで呼び止める。

「散歩…」

私は強く腕を振ってキキヨウの手を払いのけ、ズンズンと部屋を出ていく。レニが両手を「やれやれ」という風に腕を上げて耳を折る状況が容易に想像できる。

そして、そんな自分にまた腹が立った。

夜はずいぶん更け込んでいた。

「ごめんなさい……………」

狭く、ぼろぼろな部屋で小さくハツカは漏らした。

「お姉ちゃん、本当はとっても優しいんです。こんな私みたいなのに、いつも時間割いて……………。ご飯も、自分は全く食べずに私にだけ。私がどうして食べないか聞くと、先に食べたって言うんです。本当は、三日に一度くらいしか食べてないのに」

「ダイエツトかな？」レニがこの場にそぐわない台詞を吐いたのでパジャマ姿の少女が、うるさい、黙つてて。と、きつく注意した。

「私、お姉ちゃんには幸せになつて欲しいんです。私にかまけてないで自分の思うとおりに生きて、自分の夢も叶えて欲しいんです。今のお姉ちゃん、自分を押し殺してて怖い」

ハツカはきつぱりと自分の言葉を、口にした。それこそが、今ウサギのぬいぐるみの耳を持つて引つ張つている少女が聞きたかつた言葉である。そして少女はハツカに、じゃあ、と。

「じゃあ、その夢。教えてくれる？」

ハツカは小さく頷いた。

妹と夢の世界から来たと嘯く二人を家に置いて私は夜の貧民街をふらふら歩いていった。

「よお、どうしたソーダ？ 機嫌悪そうだな？」

一人の仕事仲間の四十代くらいの男が声をかけてきた。私はそこまでこの人は嫌いではないのだが。

「別に。おじさんには関係ないじゃん」ぶつきらぼうに答える。

「おいおい、若い子に冷たくされるなんて、おじさん悲しいぜ？ それより、ホラ。約束

の品だ。こんなモン、何に使うか知らないけど、親方にバレたら事だぜ？　ただ、金は頂くけどな」

おじさんは二枚の合金属の板と大きめの歯車をいくつか私に手渡した。

「あ、ああ。ありがとう」と、私は早口に言っつてそれらを受け取る。

それを見たおじさんはスカツとする笑顔で答えた。

「ああ、またなんかあつたら言えや」

「うん。いつもごめんねおじさん。ボスがケチなせいで」

私が嫌味に言うとおじさんは

「ケチか！　はっはっは、そりゃ嫌われてんなア！　——ただ親方はお前のこと、案

外気に入つてたりするんだぜ？」

「……ボスが？　そんなわけ……」

私が否定しようとする、おじさんがすかさず言う。

「お前見てるとな、なんか気分が晴れるらしいんだよ。まあ、俺もそうなんだが。普通は新人にあんなに注意したり指示したりしねえんだぜ？」

驚いた。口うるさいジジイかと思ってたが、本当は寡黙な人だと言う。それが、どうして私だけに……。

「ソーダ、お前つて一生懸命だしな」

おじさんが唐突に話し出した。

「一番俺らの中で真面目にやってるだろ？ 親方に怒られても、俺の仲間には冷やかされても、給料下げられても嫌な顔せず、根詰めてるじゃねえか。親方もお前のその真っ直ぐな感じが気に入ってんだろ」

多少の嫌味が含まれていたような気もするが、私はおじさんの話を黙って聞いていた。

「そーいや、親方んとこの息子にルーカンつつー誠実そーな奴がいたよな？ あいつもお前のこと相当気にかけてるから、出来るだけ気持ちには答えてやれよ？」

ルーカンの名が出るとは、意外だ。しかし、何だかおじさんの口調が変で、怪しい感じがしたため横目になって聞く。

「それ、どういう意味よ？」

「そーいう事だ。せつかくルーカンが快くお前と妹を親方の家にいてもいいって提案してきたのに、ケつたらしいじゃねえか。もつたいねえな。何でだよ？」

いつそれをおじさんが聞いたのは知らないが、私はルーカンに答えたように、同じ事を繰り返した。

「だって、私には夢があるもの。ルーカンとボスの家にいちや達成できない夢がね」

それを聞いたおじさんは「夢、ねえ」と少し考えて感慨にふけていた。「自分もそん

な時代あったかな……」などとブツブツ呟いている。そして唐突に首をこちらに回して言った。

「それって、どんなだ？」

私は町の上に浮かぶ夜を見上げて、ハッキリと答える。

「空を飛ぶ夢」

しばらくの後、おじさんに再び礼を言い私は二枚の金属板と大きな歯車を持って、家へと向かって歩く。わざわざ中心街ではなく貧民街を通って帰るのは何故だろうか。ただ、中心街は息が止まるくらい居心地が悪い。

いくつかの真つ暗な角を曲がり、古くて狭い我が家に着いた。しかし、家に入ってしまった私のベッドのある部屋には誰もいなかった。二人はまたどこかへ行ってしまったのだろうか、と思いい妹の部屋を覗くと。

「……いるし」

和気藹々と話していた。ハツカも楽しそうに笑っている。

「あ……おかえりなさい、お姉ちゃん」

口元が若干ひきつった私の顔を見たハツカが、慌てて言う。

「あら、おかえりなさいソーダ」

「おかえりー、お姉ちゃん」

と返事が二つ後を追ってかけられる。

「とりあえず、誰がお姉ちゃんだウサギ。耳掴まれたら手足短すぎて何にも出来ないくせに」

レニを見下しながら私は言う。

「苛立たせることは出来るけどね」と、的を得た回答が来たが無視。

「さ、寝なさいハツカ。もう外は真つ暗よ」

いつもより少し時間は早かったが、二人がいつまでもハツカと話し込みそうだったので、ここで切り上げさせる。

「……はい。じゃあ、キキヨウさん、ウサギちゃん。お話してくれてありがとう！ おやすみなさい」

ハツカは別れを惜しむように言った。笑顔で手も振ってくれる。

「おやすみなさい」「おやすみ」

キキヨウも手を振り、レニも耳をピコピコ折り曲げて言った。そして、ハツカの部屋から二人を追い出し、私も「おやすみ、ハツカ」と額を撫でる。

「うん、おやすみお姉ちゃん」気持ちよさそうに答えるハツカ。それを見届けて私は部屋の暗い照明を落とした。

自分の部屋に戻ると、キキヨウがじつとこちらを見ているのに気が付いた。私は驚

き、一瞬固まるがすぐに我に返って。

「何よ？ 妹から何聞いたか知らないけど、軽蔑するなら勝手にすればいいじゃない」

もちろん、妹がそんなことを言うはずがないのだが、自虐的になってしまふ。

「いいえ。そもそも、善悪で私たちは夢は見ないもの。だから軽蔑も敬いもせずに私たちはあなた達をただ見るだけ」

キキヨウはまた訳の分からないことを言つてレニに話を渡す。

「まあ、君のことを妹さんから聞いたのは確かだね。聞いたよ、夢の話。空飛ぶんだつてね？」

「……ええ、そうよ。笑いたきや笑えば？ 私はいつも大まじめだから」

それを聞いたレニが「やれやれ」と首を横に振つた。そして、色が変わらないボタン目で私の目を見据えて言う。

「だから見るだけだつて。だけど、見るんだつたら楽しい方がいいだろう？」

「最近の夢は暗いのばかりなのよ。そろそろ、感動のエピソードもあつてもいいところじゃない？」

二人はそう言つて、にやりと口を歪ませた。

もちろん、私には二人が何を言っているのか、何を思っているのかなんて皆目見当も付かない。少なくとも、今は。

二人は私の恥ずかしい夢を全て妹から聞いていた。なんと口の軽い妹なのだろう。他人から自分の夢を語られるのは初めての経験だが、言いようのない恥ずかしさだ。

「恥ずかしくないわ。むしろ、尊敬する」

キキヨウは目を閉じて言った。「私にはそんな大きな夢なんてないもの」と続ける。

「……………じゃあ、どうするの？ まさか手伝う訳じゃ……………」

私が少し冗談気味に笑いながら言うと、キキヨウはおろか、レニさえも真面目な顔をして頷いた。

「ええ」

「時間もないんだろう？ 今日入れても三日もないじゃないか」

レニは、リミットまで知っていた。これは、誰も知らないことなのに。

「何で三日後って知ってるのよ？ そこまでハツカに言った覚えはないわよー」

確かに、期日は残すところ三日。しかし、それは私が勝手に決めた期日なのだ。他の誰が知っているはずがない。

するとレニは涼しい顔をして言う。

「だって、三日後は君の妹のハツカちゃんの誕生日らしいじゃないか。本人が喜びながら言ってたんだから、間違いはないね」

だからといって、それが期日になるとは限らない。何より私の夢だ。もし誕生日で叶

えるなら、普通は自分の誕生日に期日を設けるのが普通の発想だ。と、そこまで思ったところで、

「ええ、普通の発想ならね」とキキヨウが言葉を遮った。

「でも、ソーダの夢はハツカの夢でもあるんでしょう？ あなたの夢は空を飛ぶこと、彼女の夢はあなたの夢が叶うこと」

「ハツカ……結構喋ったのね」

私は呆れて言う。初対面の二人にここまで話していいのか、と。いや、ハツカは基本無口だ。つまり、キキヨウとレニが初対面でもそこまで話せるほどの関係を築いたのだ。コミュニケーション能力というか、聞き上手なのだろう。

「そして、この床」

と、レニが足踏みしながら言う。ぬいぐるみを床に投げたときのように、乾いたぼすぼす、という音がする。

「カーペットでうまくカモフラージュされてるけど、この下空洞だよね？ 他の所と足音が……ホラ、違う」

全くもって、驚くくらいに正解なのだが、レニの足音はどれもこれもぼすぼす、という気の抜けた音で一緒だった。どういう顔をすればいいのかわからない。

「何だいその微妙な顔は？」

微妙な顔をしていたらしい。レニは不機嫌そうに耳を折り曲げた。

それから、まだ私と妹しか知らない秘密の地下室に会ったばかりの少女とうさぎのぬいぐるみを上げるようになった。

「上げるというか、下りてるんだけどね」

地下室とは言っても名ばかりで、実際には借り家の床板をはずし、土台の三畳程度の広さを六メートル掘り下げただけである。よって階段など気の利いたものはなく、粗末なロープが一本垂らしてあり、それをレニが言う通り上り下りするのである。

照明は無理矢理家から電気を引っ張っているので暗いことはないが、それでも上よりかは暗く、狭い。三人、いや二人と一匹が入るには少々窮屈だ。

「これが、例の空を飛ぶ予定の物？ 意外に小さいわね」

キキョウが部屋に降り立つと部屋の真ん中にある物体に手を触れた。

「予定というか、模型よ。いきなり本番で飛んで怪我したら大変じゃない。だから、フライトのテストはこのサイズで行うの」

私はその三十センチほどの模型を手に取る。これはまだ飛ぶことが出来ない。

「何だか町で走ってた自転車みたいなのに似てるね。もしかして、あれを基にして？」レニは模型をまじまじと見ながら聞いた。

「ええ。私の仕事先がこのツーリングの製造をしているから、部品は手に入りやすいの。」

部品は主に使い終わった廃材だから、盗みにはならないわ」

私は先ほどの外出で手に入れた金属板と大きな歯車を取り出す。

「これと、そこにある本物のツーリングとその他の廃材から本物の空を飛ぶ物を創るの。まだ、模型じゃ飛ばないけど……」。私が一生懸命ペダルをこいで、飛べるように設計してる。だから、あんた達がやることはもう……」

と、私が言いかけたところで。

「早く出来るに越したことはないんでしょう?」

「フライトのテストの回数は多過ぎることはないしね」

分からない。どうして二人がそうまでして私に尽くしてくれるかが、分からなかった。

「理由が欲しいのなら、言おうか?」

キキョウが何故か震える私を見て言った。

「二泊三日、一日三食付き。ありがたく受け取るわよ」

……あんた達のどこが流浪の民なんだ。

しかし、二人の助けは思っていたよりも作業効率を高めた。一人で最低三日はかかる行程を半分。つまり、一日半で終わることが出来た。

「じゃあ、私買い物行ってくるから! 食べたい物あったら言って!」

私は最終調整を終えて地下室から出る。そして、奥の寝室でくつろぐ二人とハツカに夕飯のリクエストを聞いた。

「ボクはステーキがいいな」

「私にはピザとか、その辺」

「私は……あこがれのオムライス……」

とにかく、家計に厳しい意見ばかりが出たので私は聞いたことを後悔した。というかピザって何だ。分からない。

「ああ……うん、じゃあ行つてきます」

少し苦笑いをしながら私は家を出た。もちろん、いつもより少し贅沢なご飯の材料を買いに。

ソーダが家を買った物で去つてしばらく経つた。キキョウが作業によつて油に汚れた手を洗っているときに、玄関のドアを叩く音がした。レニと会話を楽しんでいたハツカが「まだお姉ちゃんは帰つてこないだろうに」という風に眉をひそめる。

「ウサギちゃん、ちよつと待つてね」

ハツカはレニにそう言つてベッドから降りた。

そして、慌ただしく玄関に出ると珍しい来客が。

「……? ハツカちゃんかい? どうして……ソーダはいないのか?」

ソーダの仕事先の親方の息子であるルーカンが立っていた。ルーカンはきよとんとした顔でハツカに尋ねる。

「あ、あの。お姉ちゃんは……」

「ソーダなら今いないわ」

ハツカがおろおろしながら答えようとすると、後ろからキキヨウが答えた。柱に背中を寄りかからせ、手を組みながらルーカンを見る。

「何のようかしら？　あの子に伝言があるなら伝えるわ」

ルーカンは誰だ、という風な視線をキキヨウに向ける。が、すぐに首を振って、

「いや、今は気にしない……。それより、ソーダに頼みがあつてきた」

「頼み？」

キキヨウは聞き返す。

「ああ……。ソーダの夢を、止めてくれ。ここ最近、ずっと俺が止めるように言つても聞きやしない」

ルーカンは早口に言った。ハツカが「え？　え？」と言う風にキキヨウとルーカンを交互に見る。そして、キキヨウが少し間を置いて口を開いた。

「そう。じゃあ、ほっとけばいいのよ。無理だと気が付いたら、きつとあきらめるわ。あのタイプじゃ止まるに止まれない」

しかし、ルーカンは食い下がらない。むしろ一歩前に入るような感じで強く言った。

「それじゃ駄目だ！ アイツは無理だと知っていても絶対にする。そういう奴なんだ！ そして、今回も……！ 失敗したら事故じゃ済まない。ヘタしたら……」
「知ってるわよ」

キキヨウは熱くなるルーカンを冷静に制す。「あの子はそうなることを前提に飛ぼうとしてる。それに」と、そこまで言つてキキヨウはハツカを見た。ハツカはよく状況を理解していないようで、いきなり視線を向けられて困っている。

「それに、これはこの子たちの夢なの。あなたの夢でもないし、ましてやこの子たちはあなたのでもない」

「……」ルーカンは声も出せなかった。

「素敵でしょう？ あなたの夢でも、ものでもないのに、あの子はあなたや他のみんなの為に飛ぶんだから」

そして、約束の三日後。完成した改造済みのツーリングを借り家の隣にある比較的高い建物の屋上へと持ち運ぶ。もちろん、許可など取っていない。

「ふう。なんとか運べたけど、どうするんだい？」

レニは汗の一滴もない広い額をこれ見よがしに何度か右手で拭い、それから手を腰に当てながら私を見た。私はツーリングを運び終えた後、すぐに風の観測などの諸作業に

取りかかっていた。と、キキヨウが私の代わりに答える。

「ジャンプ台を運ぶんでしょ。さつき話したばかりじゃない」

「ああ、それは昨日の晩ご飯のこと考えてたから」

「どうして昨日のこと考えてたのよ。脳の活性化をはかったのかしら？」

「活性する脳もないけどね」

そんなことを言い合いながらレニとキキヨウが屋上から出ていった。

ちなみに、私は落ち着きながら作業をしているが、先ほどから一切言葉を口にしない。
なぜなら、

(・・・うう、ヤバイ。なんか、気分悪い・・・)

この上ないくらい緊張していた。

(よく考えれば空を飛ぶって人間業じゃないよね……。そもそも私たちがこの地球で暮らせるのは地面しかないわけで、空なんて未知の領域だよね・・・)

私は心の中で自問自答を続ける。足も少し、今更ながら震えてきた。

「ソーダ」

ハツとして振り向くと、キキヨウが呆れ顔でソーダを見ていた。

「な・・・何よ。今集中してんの！」

それに、あんたは今屋上から出ていったばかりでしょう、と付け加える。

「レニに全部任してきた。それより、大丈夫かしら？ 顔色悪いわよ」

顔色も悪いらしい。自分では気が付いていなかったが、実は。

「今更、怖くなったの？」

指摘された。凶星。頷くしかない自分がいる。

「怖いよね。まあ、それが普通よ」キキヨウは私にそう言った。

「でも、私はこの夢を……」

「命が惜しいなら」キキヨウは言った。私の言葉を遮って、きっぱりと言った。

「命が惜しいなら、止めるべきよ。今までのテスト飛行はろくに成功してないわ。――

――無理に今日、する必要はないわよ」

確かに、今までのテストでは一度しか目標の距離に届いていない。可能性で言えば数パーセントの世界だ。私は今から飛び降り自殺をするようなものである。だが、

「……もう、引けないわよ」

「――え？」キキヨウは目を開く。

「もう、みんなに言っちゃったし、下には見物の人も何十人、何百人ともいるし！ アンタたちももうすぐ帰っちゃうし……何より、ハツカが……ハツカはもう……」

ハツカの容態はここに来て一気に悪化してきた。もう自力じゃ立てないほどに。い

つも、苦しそうに息をしているのだ。

「疲労が原因にあるとしたら、それは治療じゃどうしようもないじゃない！ あれだけ寝てても、もう疲れたしか口にしないのよ！ …… 私たちに来ることなんて、ほとんど無いの。だから、せめてハツカの夢は叶えてあげようって ……」

「だったら、もう何も言わないわ。これはあなたの夢であり、妹の夢でもある。私の夢じゃないんだから、そこまで言われれば私の助言は意味は為さない。だからせめて、自分に後悔しない選択をしなさい」

キキヨウは微笑んでくれた。彼女が笑う姿は余り見たことがないが、それでも一番心のこもっていた微笑だった。

「…うん、ありがとうキキヨウ」

まだ、気持ちは整理できてなくて、恐怖心も拭えてないけど。それでも元気は出た。

「もう大丈夫、きつと飛べる」

気持ちはもう、固まった。

さて、屋上から下を見下ろせば人が手のひらに収まるくらいの大きさでしかなかった。今私と同じ高さにいるのは、この改造ツーリングと鳥と雲だけ。実際にはキキヨウも隣にいるのだが、彼女はどうかやら下に降りるらしい。

「じゃあね、ソーダ。飛べるといいわね」

まるで、今生の別れのように不吉な臭いを漂わせた言葉を最後に、キキヨウは下へと降りていった。

そして、日が真上に昇ったとき。私は出来るだけ車体と自分を軽くするために、関節にサポーターと頭にヘルメットだけを装着してツーリングに乗り込む。もし、落ちてしまえば痛い、じゃ済まないだろう。

ツーリングの動力は左右に伸びる翼が風を受け、ペダルを漕いで螺旋状に後輪の左右に取り付けたプロペラで少しでも車体を浮かせる。車体の部品はほぼ空洞になっており、軽さと機動力を重視した設計だ。その分、強風が吹けば風に流されやすく一気に墜落の危険性がある。

「勢いよく空へ飛び出して、ギアチェンジしてプロペラへと切り替えて……後は風を読むだけ……」

たったそれだけで、理論上空を飛べてしまう。なのに、テスト飛行では成功確率はゼロに等しかった。

失敗すれば、笑いや。私だけではなく、おそらくハツカも同じ扱いを受けるだろう。だけ。

(だけど、それでもやらなくちゃいけない)

町は衰退してきている。度重なる凶作や災害によって疲弊しきっている。そんな世

の中だから、私たち労働者に希望も自由も見いだせない。

だからこそ、飛ぶ意味がある。

だって、私は――。

「みんなの為だよね」

ハツとなつて後ろを振り返ると、そこには立てないはずのハツカがいた。

「ハツカ……？ アンタ、何で」

「お姉ちゃんが飛ぶのつて、みんなの為だよね？ いつも、自分一人の為とか、自己中な性格振りまいてるけど……。本当は町のために一生懸命なんだよね？」

ハツカは頬を濡らしながら訴えかける。何を伝えようとしているのか、分からない。そもそも、そんなつもりで私は飛ぶんじゃなくて……。

「ウサギさんが言つてたよ……！ あの子は一番最初に町のことから話して、次に君のことを語つたんだ。それも、とても楽しそうにねつて！ だから、お姉ちゃんは命を懸けて町に希望を……、自由の象徴である空を飛ぶんだつて……。」

大粒の涙がハツカの頬を伝う。私はただ呆然とその言葉を聞く以外出来なかつた。

ハツカは息を整えて、最後に一つ。

「お姉ちゃん……。ぐすつ……。」

えづきながら、最大の感謝を述べる。

「ありがとう……」

私は。

「私は……」

そこで、時が止まったような気さえた。心の中で様々な思いが渦巻いて、視界がどんどん滲んでいく。余りの衝撃に、それ以上口を動かさなかった。そして、何も出来ない体とは裏腹に心の中はものすごく活発で、足が、体が震えてきた。

——分からない。

「あ、あれ……？ 何でだろう……？ この期に及んで、怖くなってきたの……かな？」

声も震えている。止められない。もう、自力じゃ自分を押さえられない。

「駄目、なお姉ちゃんだよ……私っ。い、今から飛ばなきゃなんないのに……どうしてかな……」

顎を伝ってツーリングの車体に滴が落ちる。私は、泣いているのか？

「嬉しくて、涙、止めらんないよ……!!」

ようやく、私は気付いた。私は、生まれ育ったこの町が、家が、妹が。

大好きで、仕方が無かったんだ。

「お姉ちゃん！」ハッカは叫びながら私に抱きついてきた。

「ハッカ……！」しつかりと抱き止め、お互いに泣き合う。

私は今、限りなく幸せ者だ。

だつて今からすぐ、大好きな妹と町のために、命を懸けて救いに行けるのだから。

人通りの少ない路地裏に、少女とウサギのぬいぐるみが並んで歩いていた。ゴミの臭いが鼻につき、ハエが数匹飛んでいる。

「どう思う？」ぬいぐるみは少女に向かって尋ねる。

「何が？」

「いや、ソーダだよ。飛べると思う？」

「おそらく、無理ね」少女は答えた。「あれじゃあ、よくて滑空と言ったところかしら」と付け加える。

ウサギのぬいぐるみはその答えに耳を折り曲げて、むすつとして言う。

「君らしくないね。結果の出ないことにあんなに手伝ったことが」

すると、少女はあら、と眩いた。

「変化は出たわよ。空は飛べなくても、町の人たちには少なくとも変化は出るわよ」

結果と変化。そこに大きな差はない。

「ねえ、本当に空を飛んだらどうなるかしら？」

少女はぬいぐるみに尋ねた。ぬいぐるみは「うーん」とわざとらしく悩んで、言った。

「飛んでも、飛ばなくても同じだと思うよ。そりゃ、飛べたらすごいけどさ。飛ぼうとしたそのこと自体が評価されるよ」

少女は「そうね」と言つて空を見上げる。

「変化といえ、私にも変化はあつたわよ」

へえ、それはどんな変化だい？ と、ぬいぐるみは少女を見て言った。

「不思議と体が軽い。まるで、疲労感を全て取つたみたいに」

少女は腕を二回ほど回して微笑んだ。

「奇遇だね。ボクも何だか心洗われた気がするよ」

そして二人はどこへともなく、煙のように消え去つた。

目が覚めると、既に日が暮れていた。

よく考えればここ二週間は部屋から出ていない。

家族関係も学校の関係も、少女にとつては無いも同然なのだ。

体感で言えば五日経っているような気分ではあるが、実際には一日も経っていない。

少し頭をぼーっとさせ、夢と現実とに区切りをつける。そしておもむろに立ち上がり、自分専用の冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し二口だけ飲む。そして、またベッドへと戻る。不思議とお腹は減っていない。ソーダの家で沢山食べたからだろうか。

いや、あれは夢だ、と少女は首を振る。

私の物語だ。現実には関係ない。

そして少女は布団を被る。隣にあるウサギのぬいぐるみを抱く。

いつしか再び夢の中へと、少女は陥ってゆく。

次の夢は一体何だろうか、と思いつながら。